

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350788

研究課題名(和文) 明治期日本における知識・教養としての古代オリンピックと近代オリンピズムとの交差点

研究課題名(英文) Crossover Point between the Modern Olympism and the Ancien Olympic Games as knowledge and education in Meiji era Japan

研究代表者

和田 浩一 (WADA, Koichi)

フェリス女学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：20309438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は明治前期に刊行された歴史書を分析し、日本が古代オリンピックをいかに受容・解釈したのかに焦点を合わせる。主な成果として、1)ギリシャ史・西洋史・世界史に関する歴史書116冊のうち、73冊に古代オリンピックに関する記述が含まれていたこと、2)古代オリンピックは中等・高等教育における学習課題だったこと、3)当時の知識人たちは古代オリンピックの社会的な機能を日本のスポーツ文化の説明に援用していたこと、が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the process how Japan accepted and interpreted the ancient Olympics by analysing history books published during the first half of Meiji era. Main results are as follows: 1) 73 of 116 books on history of Greece, Europe and the World mentioned the ancient Olympics, 2) the ancient Olympics were topic to learn in the secondary and advanced education, and 3) the intellectuals at that time quoted social function of the ancient Olympics to explain characteristics of Japanese sports culture.

研究分野：体育・スポーツ史

キーワード：古代オリンピック 近代オリンピック クーベルタン オリンピズム 嘉納治五郎 明治期日本 ギリシャ史 歴史書

1. 研究開始当初の背景

本研究申請時、日本は4回目のオリンピックを迎えようと2020年大会の東京への招致に邁進していた。この日本は、実は明治を迎えるまで、オリンピックを知らない国だった。日本は一体、オリンピックをどのように受け入れ、その理念であるオリンピズムをどのように理解してきたのであろうか。

このような問題意識のもと、研究代表者はオリンピズムの日本的な解釈の源流を書誌学的に跡づけてきた(Wada, 2007)。その後、第1回近代オリンピック・アテネ大会が開かれた1896年までの明治前期に刊行された歴史書の中に、古代オリンピックに関する記述があることに注目し、古代ギリシャ史を含む歴史書の文献目録の作成と文献の収集とを少しずつ進めていった。そして、一連の作業を通して導かれた二つの仮説が、本研究を着想させるきっかけになった。

一つ目は、日本のオリンピック・ムーブメントへの参加に携わった嘉納治五郎や大森兵蔵、押川春浪、中馬庚といった体育関係者や文学者などを含む、いわゆる当時の知識人たちには、古代オリンピックに関する知識が教養としてあり、これが彼らの行動を支えた一つの精神的・理論的基盤になったのではないかという仮説である。

二つ目は、欧米とは異なる精神的支柱をもつ日本は、明治期に輸入された古代オリンピックの知識を、欧米人である近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン(1863-1937)とは異なる態度で吸収して、これを近代オリンピックへの参加に結びつけたのではないかという仮説である。

これら二つの仮説の検証を試みる本研究は、オリンピズムの日本的な受容に関するこれまでの研究の弱点であった古代オリンピックの受容過程の解明を進めるものであるとともに、古代オリンピックと近代オリンピズムの理解を、欧米以外の地域的・文化的視点から跡づけようとするユニークな研究であると考えた。

2. 研究の目的

この研究の目的は、古代オリンピックの知識が明治前期の日本へどのように伝わり、オリンピズムという理念に基づくオリンピック・ムーブメントへの参加を推進した知識人たちがこれをどのように解釈したのかを、古代オリンピックに関するクーベルタンの説明と比較しながら特徴づけることである。具体的な課題は、次の3点である。

- (1) 日本における古代オリンピックの知識のルーツを書誌学的に明らかにするとともに、歴史書における古代オリンピックの記述内容を整理する。
- (2) 古代オリンピックが明治前期の知識人たちの教養たりうる存在だったかどうかを、当時の教育機関のカリキュラムにおけ

る古代ギリシャ史の位置づけを検討しながら明らかにする。

- (3) 明治前期の知識人たちが古代オリンピックをどのように解釈したのかを、クーベルタンによる理解と比較しながら説明する。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で掲げた3つの課題には、以下の方法で取り組んだ。

- (1) 古代オリンピックに関する知識のルーツの解明

明治前期(明治元~29年)に刊行されたギリシャ史およびギリシャ史を含んでいると想定される西洋史・世界史関係の歴史書を網羅的に収集し、古代オリンピックに関する記述の有無を確認する。この際、とりわけ明治初期に刊行された古代オリンピックの記述を含む歴史書の原典を、史料批判によって特定する。さらには、収集した歴史書における古代オリンピックの記述内容を整理し、その類型化を試みる。

- (2) 教育機関のカリキュラムにおける古代ギリシャ史の位置づけの解明

明治前期における外国史教育に関する先行研究をもとに、各学校種における外国史教育の位置づけとそこで採用されていた教科書について整理する。その後、これらの外国史教科書における古代オリンピックに関する記述内容を分析し、明治期の中等・高等教育で扱われた古代オリンピックの知識の概要を明らかにする。これらの作業により、古代オリンピックの知識が明治前期の知識人たちの教養たりうる存在であったかどうかを検討する。

- (3) 明治前期知識人たちによる古代オリンピックの解釈の分析

明治前期に出版された新聞・雑誌の中で古代オリンピックに言及している記事を収集し、それぞれの著者が古代オリンピックをどのように解釈していたのかを分析する。また、近代オリンピックの創始者クーベルタンによる古代オリンピックの理解と比較しながら、明治前期知識人たちによる古代オリンピックの認識の特徴を説明する。

4. 研究成果

以下、「2. 研究の目的」と「3. 研究の方法」で示した3つの課題に対応させながら、本研究で得られた成果を整理する。

- (1) 古代オリンピックに関する知識のルーツの解明

明治前期に刊行された古代ギリシャ史を含むと思われる歴史書リストの作成

以下の先行研究と国立国会図書館の所蔵資料検索システムとを利用して、計118冊に

のぼる歴史書のリスト(1868~1896年刊行)を作成した。

財団法人開国百年記念文化事業会『鎖国時代日本人の海外知識:世界地理・西洋史に関する文献解題』原書房、1978(1953)、pp. 411-484。/高市慶雄「外国文化関係文献年表」『明治文化全集第7巻 外国文化篇』日本評論社、1968、pp. 558-577。/海後宗臣・仲新編『近代日本教科書総説 目録篇』講談社、1969、pp. 387-429。/酒井三郎『日本西洋史学発達史』吉川弘文館、1969、pp. 37-80。/NDL-OPAC(キーワード:希臘史、万国史、西洋史ほか)

で抽出した歴史書 118 冊における古代オリンピックに関する記述の有無

リストに掲げた 118 冊のうち 116 冊(約 98%)の内容を、複数の大学図書館と国立国会図書館(デジタル資料を含む)で確認した。内容を確認できた歴史書 116 冊のうち、古代オリンピックの記述を含むものは 73 冊(約 63%)、含まないものは 43 冊(約 37%)であった。

明治初期に刊行された歴史書の原典

古代オリンピックに言及した最も早い時期の歴史書のうち、原典情報が曖昧だった以下の 2 冊の原典を特定した。

『泰西史鑑』(1869): T. B. Welter. *Lehrbuch der Weltgeschichte für Gymnasien und höhere Bürgerschulen* (初版は 1826 年、本研究では 1831 年版を確認)の抄訳である W. van den Berg. *Handboek voor de algemeene geschiedenis voor gymnasien en opvoedingsgestichten* (1835)からの重訳。なお『泰西史鑑』は 1869-1881 年にかけて出版されたが、古代オリンピックの記述を含む上編は 1869 年刊行である(都筑、2016)。

『西洋史記』(1870): Daniel, Jacques-Louis, *Abrégé chronologique de l'histoire universelle* の 1859 年版と 1865 年版の異同を確認し、この書の原典が 1865 年版であることを特定した。

収集した歴史書における古代オリンピックの記述内容の整理と類型化

明治前期に刊行された歴史書は 1887、1888 年頃までは主に、外国語で記された 1 冊の歴史書を翻訳・抄訳する形で編纂されていた。これに対し、1887 年以降は外国語で記された複数の歴史書を参照しながら編まれていった。つまり、日本語による歴史書の内容は 1887 年頃を境に、外国語文献の単なるコピーから、日本人著者によって取捨選択された歴史的事実・解釈の総合的記述へと変化していった。

また、古代オリンピックに言及している歴史書 73 冊の記述内容には、原典あるいは参考図書とした外国語文献の種類によって違いが見られた。例えば、Sewell(1869)を原

典とする『希臘史略』(1872)と『希臘史直訳』(1888)と同じく Chambers(18??)の『希臘史』(1876)、Swinton(1874 他)の『万国史直訳』(同名異書計 7 冊)や『万国史』(同名異書 2 冊)、『万国史要』(1886)、『万国史直訳講義』(1889)は、1)四大競技祭(Panhellenic Games)という総称とともに、オリンピック祭(Olympic Games)とネメア祭(Nemean Games)、イストミア祭(Isthmian Games)、ピューティア祭(Pythian Games)の概要を記すとともに、2)優勝者には葉冠が与えられたこと、3)オリンピックアードが BC776 年を起点とする 4 年 1 周期の期間を指すこと、4)古代オリンピックは単なるスポーツイベントではなく、文芸とスポーツとが融合した宗教的な祭典であることにも触れている。これに対し、Parley(1860 他)を原典とする『万国史』(1876)や『万国史独稽古』(1883)、『万国史直訳』(同名異書計 10 冊)、『万国歴史』(1888)は、上記 1)~4)については触れていない。

つまり、明治前期の歴史書における古代オリンピックの記述は、古代ギリシャにおける四大競技祭の存在やその社会的な意味にまで踏み込む包括的なものと、オリンピック祭のみの形態的な説明にとどまる単線的なものの 2 つに大きく類型化できる。

(2) 教育機関のカリキュラムにおける古代ギリシャ史の位置づけの解明

明治前期の中等教育・高等教育機関で用いられたギリシャ史を含む歴史書

本研究では文部省調査局『日本の成長と教育』(1962)に基づき、明治前期の中等教育機関と高等教育機関を次のように定義しておく。中等教育機関:中学校、東京女子師範学校、師範学校、高等女学校/高等教育機関:東京大学(予備門)、東京外国語学校、東京師範学校、帝国大学、高等学校、専門学校、高等師範学校、女子高等師範学校。

ちなみに、中等教育および準中等教育在学者の該当年齢人口に占める比率は、1895(明治 28)年でそれぞれ 1.1%および 4.2%である(文部省調査局、1962)。本研究では明治前期の知識人を、当時の中等以上の教育機関で学んだ人々であると定義しておきたい。

満井隆行「明治初期の外国史教育」(1960)と(1)の で挙げた文献で示されている、明治前期の中等教育・高等教育機関で採用された古代オリンピックの記述を含む歴史書は、次のとおりである(括弧内の人名は原典の著者)。

『泰西史鑑』1869(Welter) / 『校正万国史略』1873(Taylor, Tytler 他) / 『万国通史』1873(White) / 『万国史』1876(Parley) / 『低洛爾氏万国史』1878(Taylor) / 『万国史独稽古』1883(Parley) / 『万国史直訳』1885-1888(Parley) 同名異書計 10 冊 / 『万国史』1885(Welter)。

中等・高等教育機関で用いられた歴史書中の古代オリンピックに関する記述

で挙げた歴史書の中で、古代オリンピックの記述内容を類型化したときに用いた4点すべて、すなわち1)四大競技祭の概要、2)優勝者への葉冠授与、3)オリンピアードが4年1周期であること、4)文芸とスポーツとが融合した宗教的な祭典であることに言及しているのは、『泰西史鑑』のみであった。

しかし、『万国史直訳』の訳者である芳川(1888)が記しているように、Swinton, *Outlines of the World's History* (1874他)は「各公私立高等学校ノ教科用書ニ供スルニ在リ」、「夙二国公私学校ノ教科書及ビ入校ノ受験科書ニ採用」(同じく蘆田、1887/竹添、1888)されていた。つまり、Swintonの著書の訳書である『万国史直訳』(同名異書計7冊)は、中等および高等教育機関に通う生徒・学生たちの参考書という位置づけであった。このように考えると、上の4点すべてに言及したSwintonの原書は少なくとも、中等および高等教育機関において副読本以上の位置づけであったと言える。

また、高等中学校ほか「各種諸官公立学校」の受験対策用に編まれた複数の問題集、すなわち『受験予備万国歴史問答』(1889)、『日本支那万国歴史問答六百題』(1890)、『日本万国支那歴史疑問答案』(1890)、『万国小歴史：試験答案』(1891)、『万国歴史問答大全』(1891)、『受験必携万国歴史問答』(1892)には、古代オリンピックに関する問題と解答案が記されている。これを裏づけるように、1878年に規定された千葉中学校のカリキュラムにおいては、「希臘史略」が第三級で扱われていた(神辺、2014)。

以上、1)明治前期の中等・高等教育機関では、古代オリンピックの記述を含む歴史書を用いた授業が展開されていたこと、2)オリンピア祭の概要のみでなく、古代オリンピックの全体像やその社会的な意味にまで言及している歴史書もそこに含まれていたこと、3)古代オリンピックは、高等中学校ほか各種諸官公立学校の入学試験で出題が想定されるトピックであったことが確認できた。したがって、古代オリンピックは当時の知識人たちにとって一般的な知識であり教養たりうる存在であったと言える。

(3) 明治前期知識人たちによる古代オリンピックの解釈の分析

明治前期の新聞・雑誌記事における古代オリンピックの解釈

本研究では、先行研究(Wada, 2007)で示された2本と新たに加えた2本を含む計4本の新聞・雑誌記事(1868-1896年)を収集・分析した。

東京大学法学部学生・大野金三郎の訳による「體操術ノ世代」(『學藝志林』第5巻第29冊、1879、pp.427-428.)は、*Popular Science Monthly* 13 (1878、pp.129-139.)に収められ

たOswald, “The Age of Gymnastics.”の翻訳である。古代オリンピックと古代ギリシャ人の体育への取り組みとを事例に挙げて体育の実践をうながす内容であり、この翻訳記事の背景には、良好とは言えない東京大学学生の健康状態があった(田端、2014)。

1887年11月15日付『読売新聞』の記事「私立農林学校予備校運動会」は、入賞者を称えるために烏帽子が贈られた様を、古代オリンピックの勝者への葉冠の授与に見立てている。

中馬庚「校風と運動家との関係を論じて京都遠征に及ぶ」(『校友会雑誌』、1894)は、ギリシャ国内を物心両面でつないでいた古代オリンピックの社会的な機能を引用して、大学を団結させる運動部による対外試合の意義について説明した。

北水生「運動会の歴史及種類」『少年世界』第1巻第7/8/9/10号、1895、pp.623-624/744-746/844-847/944-945)は、単なる欧米の模倣ではないスポーツの自国化を認識する中で、古代ギリシャの「人種的決断力」を強化した古代オリンピック的な性格が日本のスポーツにもあると主張した(和田、2014)。

明治前期知識人たちによる古代オリンピック理解の特徴およびクーベルタンによる理解との比較

で検討した記事4本のうち、外国語雑誌の翻訳である「體操術ノ世代」(1879)を除く3本は、古代オリンピック優勝者への葉冠授与の意味や古代ギリシャにおける古代オリンピックの社会的な機能に注目し、これを十分に咀嚼した上で、日本の運動・スポーツ文化の説明に援用していた。これらの記述は、体育奨励のために古代オリンピックの史実を用いた体操伝習所教授ジョージ・アダムス・リーランド(1850-1924)による説明(横井琢磨『体育論』1883、星野久也『体操原理』1887、松田正典『普通体育論』1896)とは、明らかに性格を異にしていた。つまり、新聞・雑誌で腕を揮った当時の知識人たちは、健康・体育奨励という文脈においてではなく、古代ギリシャ史という歴史空間における文化的・社会的存在として古代オリンピックを理解していたと言える。

一方、近代オリンピックの創始者クーベルタンも、単なる制度や各種運動(スポーツ)の形式そのものを、古代オリンピックに見ていたわけではなかった。彼が近代オリンピック創設に際して注目したのは、身体と知性と品性の3要素を育む競技的・芸術的・文化的・宗教的な属性を帯びたオリンピアという都市の教育的な機能だった(Coubertin, 1894/1909a/1909b; Müller, 2005)。実際クーベルタンは、1908年に「近代オリンピア」をテーマにした建築コンクールを計画し、1918年にはローザンヌ近郊のドリニエでオリンピアの現代への再生を企てた(Gilliéron, 1993)。

このようなオリンピックという古代都市の教育的機能への注目は、日本の知識人たちによる古代オリンピックの理解に見られなかった点である。

なお本研究の期間内に、後にアジア初の国際オリンピック委員会委員となる嘉納治五郎(1860-1938)の思想が、古代オリンピックからの影響を受けたのではないかという仮説を裏づける史料は見つからなかった。ただし、古代オリンピックの記述を含む桑原啓一『新編希臘歴史』(1893)の序を嘉納が執筆し、当時の日本の社会の中で古代ギリシャ史を学ぶことの意義を述べていたことの発見は、今後の研究の発展に寄与してくれるものと考えている。

引用文献：

- Chambers, *Chambers's Information for the People*, 5th ed. 18??
- Coubertin, « Les fêtes du congrès », *Bulletin du Comité International des Jeux Olympiques*, juin 1894, no. 1, p. 3.
- Coubertin, « Une Olympie moderne », *Revue Olympique*, octobre 1909a, p. 153.
- Coubertin, *Une campagne de vingt-et-un ans*, 1909b, pp. 89, 192.
- Gilliéron, *Les relations de Lausanne et du mouvement olympique à l'époque de Pierre de Coubertin 1894-1939*, 1993, pp. 77-80.
- Müller, "Coubertin and Greek Antiquity." in: Wassong (Ed.). *Internationale Einflüsse auf die Wiedereinführung der Olympischen Spiele durch Pierre de Coubertin*, 2005, pp. 55-66.
- Parley (Goodrich), *A Pictorial History of the World, ancient and modern, for the Use of Schools*, 1860 他
- Parley, *Universal History*, n.d.
- Sewell, *First History of Greece*, 1869
- Swinton, *Outlines of the World's History*, 1874, 1879, 1884, n.d.
- Taylor, *A Manual of Ancient and Modern History*, 1867.
- Tytler, *Universal history from the creation of the world to the beginning of the eighteenth century*, 1834 他
- Wada, "First Contact: Olympic Ideas and Ideals in Japan until 1909." in: Niehaus and Seinsch (Eds.). *Olympic Japan — Ideals and Realities of (Inter) Nationalism*, 2007, pp. 18-21.
- White, *Outlines of universal history*, 1870.
- 神辺靖光編著『明治前期中学校形成史 府県別編 III 東日本』梓出版社、2014、p. 48.
- 満井隆行「明治初期の外国史教育」『茨城大学教育学部紀要』9、1960、pp. 53-76.
- 文部省調査局『日本の成長と教育』帝国地方行政学会、1962 (<http://www.mext.go.jp/>

b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_012.html;http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_010.html)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

都筑真「『泰西史鑑』にみる古代オリンピック」『日本女子体育大学紀要』第 46 巻、査読あり、2016 年、pp. 123-130.

井上洋一・和田浩二・小石原美保・石坂友司・黒須朱莉「第 2 回奈良女子大学オリンピック・公開シンポジウム採録『オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズムを問う』」『奈良女子大学スポーツ科学研究』17、査読なし、2016 年、pp. 47-79.

和田浩二「クーベルタンが考えたオリンピズム」『体育史研究』第 33 号、査読なし、2016 年、pp. 33-39.

田端真弓・榊原浩晃「『體操術ノ世代』(明治 12 年)の記述内容ならびに資料的価値の検討：東京大学創設期における体操の背景と古代オリンピックに着目して」『体育史研究』第 31 号、査読あり、2014 年、pp. 47-60.

榊原浩晃・田端真弓「欧米の身体教育の日本への紹介資料：『體操術ノ世代』(明治一二年)の校注作成」『福岡教育大学紀要』第五分冊第 63 号、査読なし、2014 年、pp. 33-52.

都筑真「明治期の福山における学校体育の展開」『福山平成大学福祉健康科学研究』第 9 巻、査読なし、2014 年、pp. 68-73.

和田浩二「新しい時代のオリンピズム、そしてオリンピックレガシー」『大学体育』104 号、査読なし、2014 年、pp. 24-35.

[学会発表](計 12 件)

和田浩二「嘉納とクーベルタンの思想的近似性」第 3 回奈良女子大学・オリンピック・公開シンポジウム(奈良女子大学) 2016 年 2 月 20 日

田端真弓「長崎県師範学校関連の『体育論』に関する資料とその内容の考察：野口則による諸本(明治 31 年)から」九州体育・スポーツ学会第 63 回大会(別府大学) 2015 年 9 月 13 日

都筑真「『泰西史鑑』にみる古代オリンピック」日本体育学会第 66 回大会(国土館大学) 2015 年 8 月 26 日

和田浩二「クーベルタンが考えたオリンピズム」日本体育学会第 66 回大会・体育史シンポジウム(国土館大学) 2015 年 8 月 25 日

藤坂由美子・山田理恵「大正期の山陰オリンピック大会に関する一考察～地域におけるスポーツ振興の事例～」第 11 回東北アジア体育・スポーツ史学会国際学術大会

(韓国 釜山 Youth-Hostel Arpina) 2015年8月12日

和田浩一「オリンピックの創出とクーベルタンのオリimpiズム：オリンピック・ムーブメントの内実と同時代的評価・誤解について」第2回奈良女子大学オリンピック・公開シンポジウム(奈良女子大学) 2015年3月8日

和田浩一「『少年世界』(1895年)に見られる古代オリンピックの理解：日本の近代体育・スポーツとの接点に注目して」日本体育学会第65回大会(岩手大学) 2014年8月27日

田端真弓・榊原浩晃「『體操術ノ世代』(明治12年)にみる和漢文の記述内容の検討：古代社会の体操とオリpiyaゲームに着目して」体育史学会第2回大会(明治大学) 2013年5月11日

WADA, Koichi. «L'influence de Pierre de Coubertin au 21e siècle : le point de vue japonais». Comité International Pierre de Coubertin, Symposium : Pierre de Coubertin and the Futur (Musée Olympique, Lausanne), Le 25 janvier 2014. (招待基調講演)

和田浩一「オリンピック教育の概念的再検討：IOC 会長辞任直後にクーベルタンが示した教育改革の内容から」日本スポーツ教育学会第33回学会大会(日本大学文理学部) 2013年10月19日

和田浩一「関東大震災直後における嘉納治五郎によるオリンピック運動への対応：嘉納の1924年2月3日付クーベルタン宛書簡から」日本体育学会第64回大会(立命館大学) 2013年8月30日

WADA, Koichi. "Knowledge of the Ancient Olympic Games in Early Meiji Era Japan." 14th Congress of the International Society for the History of Physical Education and Sport (National Taiwan Normal University, Taiwan), 20 August, 2013.

[図書](計5件)

N. Müller; S. Wassong; K. Wada; H. Lenk; P. Clastres; J. J. MacAloon; E. Meinberg; M. Messing; N. S. Todt; W. Firek; E. Monnin; I. Nikolaus; E. Hong; M. Keim; J. -L-Chappelet; J. Krieger. *Pierre de Coubertin and the Future* (WADA, Koichi. «L'Olympisme de Pierre de Coubertin appliqué au XXIème siècle : Bilan historique et perspective d'avenir du Japon», Agon, 2016, pp. 113-128.

藤井雅人・ビットマン ハイコ・和田浩一・榊原雅之・佐々木浩雄・藤坂由美子・寶學淳郎『体育・スポーツ・武術の歴史にみる「中央」と「周縁」：国家・地方・国際交流』(和田浩一「21世紀に生きるピエール・ド・クーベルタンのオリpiズム：日

本の過去と未来の視点から」、道和書院、2015年、pp. 224-241.

K. Georgiadis (Ed.). *Olympic values: Respect for diversity* (WADA, Koichi. "Respect your sport: Rules, culture, internal products"), International Olympic Academy, 2015, pp. 145-152.

金香男・並木真人・横山正樹・江上幸子・崔学松・齊藤直・大野英二郎・和田浩一・比嘉マルセーロ『シリーズ・ワンアジア：アジアの相互理解のために』(和田浩一「嘉納治五郎から見たピエール・ド・クーベルタンのオリpiズム」) 創土社、2014年、pp. 167-189.

菊幸一・真田久・村田直樹・友添秀則・清水諭・田原淳子・山口香・溝口紀子・永木耕介『現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか：オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン』(永木耕介「柔道とスポーツの相克」「現代における「自他共栄」主義の実践的啓発」) ミネルヴァ書房、2014年、pp. 155-190, 227-253.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 浩一 (WADA, Koichi)

フェリス学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：20309438

(2) 研究分担者

田端 真弓 (TABATA, Mayumi)

大分大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：60648608

都筑 真 (TSUZUKU, Makoto)

日本女子体育大学・体育学部(運動科学科
スポーツ科学専攻)・准教授

研究者番号：40566361

永木 耕介 (NAGAKI, Kosuke)

法政大学・スポーツ健康学部・教授

研究者番号：10217979

藤坂 由美子 (FUJISAKA, Yumiko)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・講師

研究者番号：20442155